仲多度郡・善通寺市　研究のあゆみ

１　研究主題　ともに学び合い，一人ひとりの考えを深める国語科学習の展開

２　研究活動の概要

(1)　４月１７日　　研究組織作り，研究主題の設定，計画立案

(2)　６月１３日　　第１回研究授業　多度津町立豊原小学校
　　３年　物語の「おもしろい」「すてき」を見つけよう
　　（中心教材「ゆうすげ村の小さな旅館」光村）

(3)　７月２４日　　国語科におけるシンキング(思考)ツールについてのワークショップ

(4)　１１月１５日　第２回研究授業　善通寺市立竜川小学校
　　１年　じどう車ずかんをつくろう
　　（中心教材「じどう車くらべ」光村）

３　研究内容

第１回研究授業では，「物語のしかけや登場人物の変化について，友だちと話し合うことで，多様な意見を聞いたり，文章を読み返したりして，読みを深める」ことをねらいとした授業が提案された。

児童は，物語の「おもしろさ」「すてき」を探しながら読み，「おもしろすてきミニブック」を作成するという言語活動を設定することで，目的意識が明確になり，必要感をもって学び合い，主体的に学習に取り組むことができていた。

本時では，山の畑の場面の出来事を読み，しかけや登場人物の「すてき」を見つける活動を行った。グループの学び合いで，一番すてきだと思う部分に意見をまとめさせたが，授業後の討議では，一つに絞らず多様な考えを出させた方が良かったのではないかという意見が多かった。また，これまでにうさぎのイメージマップを各自が書いているので，自分が見つけたしかけを友だちに説明する際にそれをもとに理由を話すことができていた。ワークシートへの書き込ませ方も工夫されており，自分と友だちとの考えを容易に比べられた。こうした考えを可視化する工夫がミニブックや掲示物に見られ，参考になった。

第２回研究授業では，「事柄の順序を考えながら読み，大事な言葉や文を書き抜くこと」を指導事項の中心に据えた授業提案がされた。言語活動として「じどう車図鑑を作って読み合う」ことを設定しており，「自分たちがじどう車図鑑を作るために，この説明文の書きぶりを学ぼう。」という目的意識をもって学習することができていた。

本時では，クレーン車のしごととつくりを見つけて絵の中やカードに書き込む活動をしたが，「うで」や「車体」という言葉の認識の違いがあったので，絵の中で確認した後，前へ出てきた児童と教師が動作化をしていた。授業後の討議では，それをさらに全体に広げて，それぞれペアで動作化させると良かったという意見が多かった。また，児童の発表に対して，教師が「しごととつくりがつながっているってどういうことなの？」と発問することで，なぜそのつくりでないといけないのかを全体で話し合い，その車の仕事に合ったつくりが書かれていることに気づかせていた。

授業後，指導者の先生から，次期学習指導要領に合わせて，つくりの説明は「しごとに直結したつくり」→「付加的なつくり」の順で書かれていることを押さえておくことが必要であると教えていただいた。

４　県の研究との関連

【今年度の研究での成果】　学び合う必要感

・　２つの授業研究とも,第１次からその単元で行う言語活動を児童に示すことにより，児童の目的意識が明確になっていた。そのため，児童は，言語活動に生かしたいという思いで，グループでの学び合いや全体での学び合いに参加し，主体的な学習ができていた。

【今年度の研究での課題】　学び合うための関わらせ方

・　授業研究の中では，色分けして教材文に線を引いたり，イメージマップを書いたりして友だちに自分の考えを分かりやすく伝えられるような工夫が見られた。今後さらに，学び合う技能を高め，図や動作など言葉以外のものも使って，より学び合いが活性化するような方法を探っていきたい。

丸亀市　研究のあゆみ

１　研究主題

ともに学び合い　一人ひとりの考えを深める　国語科学習の展開
－子どもの関わりを促す支援の工夫－

２　研究活動の概要

（１）４月１１日（火）　城西小学校　　研究組織作り、研究主題の設定、年間計画作成

（２）５月３１日（水）　富熊小学校　授業研究・討議
３年　「話したいな、うれしかったこと」

（３）１１月２９日（水）　城東小学校　授業研究・討議
５年　「五・七・五で表そう」

３　研究内容

・　３年「話したいな、うれしかったこと」では、うれしかった体験についてスピーチする活動を通して、事柄を順序立てて話したり、話の中心を意識して聞いたりすることができることを目指した。そのために、スピーチの話題について出来事の様子や気持ちを詳しく思い出し、話す内容を集めメモに書き出した。その際、以下の３点に留意した。

①　話題について詳しく思い出すために、３人一組になり、お互いのうれしかったことについて話したり質問したりする場を設定する。その際、質問し合う様子がイメージできるように、教師が話し手となり聞き役の児童の質問に対し答える様子をモデルとして提示する。また、質問することが難しい児童に対する支援として「質問の技」を提示し、参考にするよう助言する。話す側も、質問にはできる限り詳しく答えるようにする。

②　メモを書き出す活動では、既習事項の「はじめ」「中」「終わり」の組み立てを意識することができるよう教科書のメモを参考にする。「はじめ」には楽しかったことの概要を、「中」には詳しい出来事とそのときの気持ちを、「終わり」には全体を振り返り、感じたことを書かせる。

③　話す事柄を選んだり順序を考えたりするときに操作しやすいように、付箋紙に出来事とそのときの気持ちを書かせる。

授業後の討議では、次の５点を中心に話し合った。

①　話題について質問し合ったりお互いにアドバイスを伝え合ったりする活動の在り方
②　付箋紙の効果的な使い方
③　話し合いのモデルの提示について

④　３人組というグループ構成について
⑤　振り返りの効果的な在り方

特に、筋道を立てて話すとは、うれしかったことに向かうまでの出来事や気持ちの変化を思い出させることが大切である。そのため、前時までに書かれた付箋紙を基にその時の気持ちや様子を個別に詳しく聞くだけでは不十分である。付箋紙の前後や付箋紙間の気持ちの変化など、付箋紙を効果的に活用しながらより深く質問をすることができるように支援する必要がある。それは、話し合いを深めることにもつながる。したがって、質問の技として、「この付箋紙の前にはどんなことがあったのか。」、「この付箋紙の後にはどんなことがあったのか。」、「この付箋紙とこの付箋紙の間にはどんなことがあったのか。その間の気持ちはどうだったのか。」といった言葉を提示する。

・　５年「五・七・五で表そう」では、俳句を作る活動を通して、感じたことや考えたことなど自らの思いを表現し、俳句を身近に感じることができる力を育てることを目指した。また、友だちと交流し、自分と友だちとの感じ方の違いや表現方法の違いを味わいながら、表現を工夫することを通して、進んで表現しようとする力を育てたいと考えた。そのために、次の４点に留意した。

①　同じ季語をもつ二つの俳句をモデルとして提示し、どちらがよいかを話し合う中で表現の工夫を全体で共有する場を設ける。
②　写真を提示し、言葉集めをした後、例文を推敲する。その際、比喩や擬人法などの表現技法を確認する。
③　自分の俳句を推敲する際には、同じ写真を選んだ友だちとの交流の場を設定する。
④　推敲前と推敲後の変化が分かるようワークシートを工夫する。

授業後の討議では、次の３点を中心に話し合った。

①　推敲する必要感の高め方と交流のさせ方
②　ワークシートについて
③　モデル提示の在り方

特に、推敲する必要感を高めるためには、相互評価が有効な手段になる。児童は、相互評価を行うことで、自分の思いが読み手に伝わっているかを確認することができ、もっと分かりやすく伝えたいという推敲への意欲化が図られる。そのためにも、学習指導過程を工夫し、先にグループでの交流を行い、各自の課題意識が高まった後に個人で考える場を設定してもよい。

また、様々な表現からよりよいものはどれかを選択する力を高めるためには、児童の思考の過程が明確化できるワークシートを用意する必要がある。そのために、付箋紙を活用し、俳句を推敲する過程を視覚化するとよいことが分かった。児童の思考過程の明確化は、教師の支援の在り方を探ることにもつながる。

さらに、俳句を作ることが楽しいという気持ち、自分の思いを伝えたいという気持ちを大切にするため、既習の俳句や有名な俳句から工夫した表現を見つけ、一覧にして提示し、使ってみようかなという思いを児童にもたせる支援も有効であることが分かった。

４　県の研究との関連

【今年度の研究での成果】　学び合うための形態・学び合うための関わらせ方

・　どの授業研究でも、グループ、ペアといった、学び合いの目的に合った形態を設定することで、子ども同士の関わり合う雰囲気が高まり、子どもの考えを深めることができた。

・　３年「話したいな、うれしかったこと」では、学び合いのモデルや質問の技を提示し、どのような言葉を使って学び合うかを児童に意識させることができた。その結果、目的意識のある言語活動を行うことができた。また、５年「五・七・五で表そう」では、推敲のモデルを示すことで、授業の見通しをもたせ、一人一人の考えを深めていくことができた。

【今年度の研究での課題】　学び合うための関わらせ方・学び合うための形態

・　どの授業研究でも、子どもたちの思考の過程を視覚化することの必要性が討議で話し合われた。グループやペアでの学び合いを通してお互いの考えを深めることができるよう、発達段階や学び合いの目的を考慮した思考ツールや付箋紙の活用の仕方を探りたい。

・　５年「五・七・五で表そう」では、子どもたちの課題意識に関連して、学び合うための形態について話し合われた。問題を解決する場面で学び合う場を設定するだけでなく、子どもたちの課題意識を高めるために、グループでの学び合いを最初に取り入れる等、1 時間の授業の中で様々な形態をどう組み合わせると有効なのかについても探っていきたい。

さぬき・東かがわ市　研究のあゆみ

１　研究主題　　主体的・協働的に学び合い，個の考えを深める国語科学習の在り方
－伝え合う意欲を高める支援－

２　研究活動の概要

（１）４月２８日（金）　研究主題設定，研究組織作り，研究計画立案
（２）６月２２日（木）　研究授業　　東かがわ市立大内小学校
６年　「新聞の投書を読み比べよう」
指導者　東部教育事務所　主任指導主事
（３）９月　４日（月）　社会を明るくする作文「ともしび」作文審査会
（４）１１月２８日（火）　研究授業　　さぬき市立志度小学校
５年　「和の文化を受けつぐ　－和菓子をさぐる－」
指導者　東部教育事務所　主任指導主事
（５）１月１９日（金）　児童文集「はらっぱ」の編集作業

３　研究内容

・　６月の研究授業では，スポーツに関する４つの投書を読み比べ，それらの中から自分が納得できるものを一つ選んでその理由を説明する学習を行った。投書の内容と自分の経験とを照らし合わせて強く惹かれた部分や，読んで自分の意見が変わった部分を中心に考えればよいと，理由を考えるときの観点を示すことで，様々な理由を考えられた。また，友だちがどんな理由でどの投書に納得したのかを，ペアやグループで交流することで，友だちの多様な考えに触れ，自分の考えを広げたり深めたりすることができた。そして，交流したことを基にして，自分自身の理由説明を文章に書き表すことができた。
・　１１月の研究授業では，児童が主体的に，目的を明確にして調べ学習ができるように，各グループで和の文化を観点ごとに調べ，分かったことを学級で発表する「和の文化説明会を開こう」という言語活動を設定した。本時では，調べ学習をする際に見通しを持たせる手段として，教材文の観点を整理する文章構成図を作成する学習を行った。さらに、文章を補うための写真などの資料の効果について，和菓子作りの道具の写真が使われている理由をグループで話し合いながら考えさせた。子どもたちは，文章では想像しにくいものや，見たことがないものなどを説明する際に写真を使えばよいと気付くことができた。

４　県の研究との関連

【今年度の研究の成果】学び合う必要感
・単元の終末で，自分たちが実際に投書したり，「和の文化説明会」を開いたりするというように，教材文で学習したことを活用した言語活動を組み入れることで，主体的に学び合う必要感が高まった。
【研究の課題】学び合いの仕方
・グループ交流が，深め合うというよりも友だちの考えを知るというレベルにとどまってしまいがちであった。根拠・理由を明確にした話し合いをすることで，問い返しが起こり，双方向のやりとりになる。対話的な学びになるような学習形態や教師の助言といった支援の方法について，さらに研究を深めていく必要がある。

高松市　研究のあゆみ

１　研究主題　　真に生きて働く国語力を育てる国語科授業の創造
～ともに学び深め合う、子ども主体の授業づくり～

２　研究活動の概要

（１）　４月　牟礼小学校　研究組織作り、研究主題の設定、年間計画作成

（２）　６月　第１回研修会　研究授業・討議

北ブロック　屋島小　２年　親友ってなんだろう～お手紙～
香西小　３年　段落の内容をとらえて「こん虫にん者のまき物」をつくろう！～自然のかくし絵～

南ブロック　円座小　４年　人物の変化をとらえて感想を伝え合おう～走れ～
川島小　２年　お気に入りの本紹介カードを書こう～お手紙～

（３）　７月　高松市　夏季研修会　高松第一小学校
香小研研究発表会の指導案検討・教材研究
講演　香川大学　佐藤明宏教授

（４）　９月　事前準備及び模擬授業

（５）　１０月　各会場で準備・打ち合わせなどの事前研修

（６）　１０月　香小研国語部会研究発表会

北ブロック　弦打小　１年　いろいろなふね　２年　ビーバーの大工事
３年　はりねずみと金貨　４年　くらしの中の和と洋
５年　注文の多い料理店
６年　町の幸福論―コミュニティデザインを考える―
鬼無小　２年　あなのやくわり　４年　くらしの中の和と洋
６年　海のいのち

南ブロック　川岡小　１年　サラダでげんき　４年　ごんぎつね
５年　注文の多い料理店
檀紙小　１年　サラダでげんき　２年　名前を見てちょうだい
３年　サーカスのライオン　４年　ごんぎつね
５年　大造じいさんとがん　６年　海のいのち

３　研究内容

（１）　１単位時間の授業における指導過程の工夫
言語活動に沿った学習問題の設定、課題解決のための学び合いのあり方を考える。

（２）　学習の目的と単元の見通しを明確にした単元構想
子どもの実態把握や単元で付けたい力を見極め、価値のある学び合いを効果的に取り入れた学習を進める。

４　県の研究との関連

【今年度の研究での成果】学び合いの仕方

ペアやグループでの交流をどの授業でも行っていた。互いの表現物を見ながら行うことで、考えを比べたり、広げたりできていた。全体交流までに少人数での交流を設けることで、自分の考えに自信を持ったり、自分の考えを整理したりすることができていた。

学級の雰囲気がよく、積極的に友だちとかかわろうとする児童が多かった。

【今年度の研究での課題】学び合う必要感

交流の際には、「何のために交流するのか」という必要感が生まれていなければ単なる発表会になってしまう。教師の言葉掛けも、「さあ、交流しましょう。」ではなく、何のために交流するのか目的を明確にした発問・指示が必要である。

「友だちはどう考えているのかな。聞いてみたいな。」「自分の考えはいいのかな。自信がないから聞いてみたいな。」などと、子ども自らが必要感を感じているような場面での交流を設定することも大切である。

坂出・綾歌支部　研究のあゆみ

１　研究主題　　ともに学び合い，一人ひとりの考えを深める国語科学習の展開
～単元を貫く言語活動の中で，子どもの関わりを促す支援の工夫～

２　研究活動の概要

（１）４月１９日　　研究組織作り，研究主題の設定，研究計画立案

（２）６月　７日　　研究授業①（綾川　滝宮小学校）
２年「二つのせつめいをくらべよう『ふろしきは，どんなぬの』」

（３）１０月１９日　研究授業②（坂出　府中小学校）
３年「グループで話し合おう『お年よりほう問について話し合おう』」

３　研究内容

（１）研究授業①より

本単元では，生活科での学習と関連させ，自分が紹介したい生き物を選んでその特徴を載せたカードを作り，１年生に紹介するという活動を設定した。

本時は，「ふろしき売り場のカードに書かれていた文章」と「本に載っていた説明文」それぞれのよさを考える活動であった。児童がそれぞれの文章が使われている場面を捉えた上で学習を進められるように，文章を掲示するだけでなく，文章のそばに百科事典で調べる場面や，ふろしき売り場の様子を再現した。この環境づくりにより，児童はそれぞれの文章が使われている場面をつかみ，学習全体を通して二つの文章のよさを読み手と関係づけて考えることができた。グループの話し合いにおいては，同じ文章を選んだ友だちと意見を出し合って，よさを短冊に書いた。グループで考えたよさを板書によって全体で共有し，比較・統合していった。そして，文の長さや詳しさはそれぞれ違うが，二つの文章の本当のよさは「読む人に合わせて書いているところ」だと捉えることができた。この学びは，１年生を意識した紹介カード作りにつながるものであった。

（２）研究授業②より

本単元では，総合的な学習と関連させ「地域のお年寄りの方を訪問するときの内容や役割について話し合う」というテーマを設定して学習を展開した。

本時は，４回の話し合いのうちの２回目であった。全員が司会者・発言者の役割を経験できるように小テーマ毎に役割を交代しながら話し合う方法をとった。発言者と司会者それぞれの立場で活用できる２種類の「話し合いの進め方シート」により，児童は自信をもって話し合いに参加し，体験を通して話し合い方をつかむことができた。また，前後のグループでペアを決め，お互いの話し合いを観察し合って評価する活動を取り入れた。見る側の児童は，評価カードを使用して自分のペアの児童の話し合いの様子を観察・評価した。評価カードでチェックしたよさを交流の場で伝え合うことで，自分の話し合いの様子を客観的に評価したりお互いの学習ぶりのよさを認め合ったりすることができた。さらに，話し合いの様子を録画して話し合う姿や使っている言葉の具体を見せたことで，児童は，本時の学びのよさや次の話し合いに向けての課題を発見することができた。

４　県の研究との関連

【今年度の研究での成果】

学習問題設定の場における学び合う必要感

・　研究授業①では，課題をつかみやすいように環境作りを工夫した。具体的な場面

の提示によってそれぞれの文章がどのような場面で使われているかをつかみ，「なぜ説明の仕方が違うのだろう。」という疑問をもち，それをみんなで考えていこうという課題意識をもつことができた。

学び合いの形態

・　研究授業②では，２グループをペアにして，お互いの話合いの様子を評価し合うという方法をとった。一斉に話し合ったのでは，話合いに参加する自分の姿を捉えにくい。しかし，評価カードに従ってお互いの学びをチェックし合うことで，児童はカードの項目を視点として話合い方を客観的に振り返り，自分の学びの成果や課題を捉えることができた。また，４つの小テーマについて話し合ったため，何度も話合いを体験できた。評価と体験を繰り返すことが，司会の仕方や発言するときの注意点を身に付けることにつながった。

【今年度の研究での課題】　学び合うための関わらせ方

・　どの授業でも，グループから全体交流へと進む学び合いの形態が取られていた。研究授業①では，グループでよさをまとめる活動，研究授業②では，グループで話し合う活動を行った。出された意見を書くだけでなく，考えの共通点や相違点を意識しながら話し合ってまとめることや，友だちの意見に反応しながら話し合うことなどをめざしたい。子どもがお互いの考えに意見しながらより深く学ぶための方法を探ることが課題である。

三豊・観音寺市　研究のあゆみ

１　研究主題　　学び合いを通して、自分の考えを深める国語科学習の工夫

２　研究活動の概要

（１）　４月２６日（水）　研究主題・組織等の決定，研究計画の立案，「やまなみ」の協力依頼，映像指導資料の視聴（三豊市役所豊中支所）

（２）　７月２４日（月）　三観小研国語部夏季研修会（観音寺市立観音寺小学校）

○　実践発表「思考ツールの活用を通して自分の考えを深める学習の工夫」

○　講演「アクティブラーニングを生かした協働的な学びⅡ」

香川県教育センター　教育研究課

３　研究内容

（１）　第１回の研修会より

三観小研国語部会研修会研修主題の達成目標として，目的意識のある言語活動を通して学び合いを工夫し，児童の考えを深める授業の在り方を明らかにしていくことを確認した。また，学び合いのある授業作りの一例として，「小学校国語科映像指導資料」から第６学年「海のいのち」を題材とした「つなげて重ねて読み解く，立松和平の表現する命～読書座談会で，作者の考えを捉え，命に対する自分の疑問を解き明かそう～」の授業の一部を視聴した。学び合いを活性化する工夫として二つのことを学んだ。一つ目は，個々の課題をグループ内で整理したものをもとに読書座談会を２回行い，そこで解決しなかった課題についてさらにクラス全体で解決していくという単元構成の工夫である。二つ目は，学び合う価値のある課題を子どもと共に吟味し，子どもから「交流したい」「友達の考えを聞きたい」という思いを引き出す課題設定の工夫である。

（２）　三観小研夏季研修会より

①　実践発表「思考ツールの活用を通して自分の考えを深める学習の工夫」では，主に三つのことについて学んだ。一つ目は，思考ツールは，考えるための手助けになると同時に，思考力を鍛えるための負荷になること。二つ目は，クラゲチャートは，人物像を考えるための根拠，心情をあらわしている言葉を読み取っていくときに有効であること。三つ目は，観点を自分で選択することで，主体的な読み手を育てることができるということ。子どもとのかかわりを促す支援として，今後の実践に生かせる貴重な提案であった。

②　講演「アクティブラーニングを生かした協働的な学びⅡ」においては，新学習指導要領の国語科における改訂の主なポイント，アクティブラーニングの３つの視点（主体的な学び・対話的な学び・深い学び）を取り入れた授業改善，指導事項を踏まえた教材研究について学んだ。アクティブラーニングの視点からの工夫・改善として，どのように課題設定をし，どんな方法で課題解決し，どのように振り返りをさせるのか，その具体的な実践例を示していただきながら，自分の授業を振り返ることができた。また，実際に「もうどう犬の訓練」の教材文を使った演習では，「教材解釈」と「教材開発」の二つの視点で教材研究を行うことの大切さを学んだ。

４　県の研究との関連

【今年度の研究での成果】　学び合うための形態

思考ツールを活用した授業実践では，４年「走れ」の教材文を使った学習で，「変形クラゲチャート」を活用してグループで交流を行った。その際，同じ人物を選んだ子ども同士でグループを作った。人物が同じなので，比較がしやすく，人物像も捉えやすいため，主体的な交流ができた。また，同じ人物でも，グループによって違いがあり，全体交流のきっかけが生まれ，その人物についての読みを深めることができた。思考ツールを活用することで，課題や教材文の特徴に応じてグループ編成を変えることで，学び合いを活性化し，読みを深めることができるということが明らかになった。

【今年度の研究での課題】　学び合う必要感

思考ツールを活用した実践では，個々の考えを可視化したクラゲチャートを活用して交流をした。問いによって観点も変わり，子どもの考えも変わる。学び合いを活性化するために，子どもたちが交流したいと思える，そして，子どもたちの多様な考えを引き出すことができる問いの設定についてさらに研修を深めていきたい。

小豆郡　研究のあゆみ

１　研究主題　　「子どもの関わりを促す支援の工夫
～目的意識のある言語活動の中で～」

２　研究活動の概要

⑴　４月２７日（水）　土庄小学校　　研究組織作り，研究計画の立案

⑵　５月２４日（金）　土庄小学校

①　今年度の研究について説明

②　９月研究授業についての概要説明

③　研究協議　　１年『はなしたいな　ききたいな』教材研究

④　指導・講話

指導者　香川教育センター　教育研究課　課長

⑶　９月２９日（木）　土庄小学校

①　研究授業　土庄小学校

１年　「夏休みの思い出を学級の友だちに話す
『わくわくスピーチたいかい』をしよう」

②　授業討議

③　指導・講話

指導者　香川県教育センター　教育研究課　課長

３　研究内容

⑴　１回目の研修について

今年度の研究について説明の後，２回目の研修で使う１年生『はなしたいな　ききたいな』の教材研究を行った。まず,「話すこと・聞くこと」の指導について本単元では何を指導すればよいのか研修した。次に授業者から，児童の実態や教材のねらいを聞いた後，単元構成や本時についてグループで考えていった。そしてスピーチメモ作りの指導の工夫やスピーチ力を高めるための指導の工夫などを研修した。

指導者からは，どんな力を子どもに付けたいかをベースに学習内容を具体化させることや学び合いが生まれるための方法，どのような学び合いをさせるとよいのかなどについて指導いただいた。

⑵　２回目の研修について

「夏休みの思い出を学級の友だちに話す『わくわくスピーチたいかい』をしよう」
(東京書籍１年上『はなしたいな　ききたいな』)の研究授業を行った。

１ 回目の研修で得た成果を元に，授業者が本単元までの既習内容や児童の表現の評価をもとにして授業を行った。まず，教師や児童のスピーチをもとに，聞きたいことを質問させることで，話すときに詳しくする観点を確認していった。また，友だちからの質問に答えることで，自分のスピーチのどこを詳しく話すとよいか見直す観点を考えることができた。スピーチメモは，折り畳み式にして始めと終わりをふやして書いていけるように工夫できた。そして自分で詳しくする観点を 3 つ選び，ペアでスピーチをし合うことがした。

指導者からは，授業を仕組んでいくときに，どんな課題意識をもたせ，言語活動でどのような学びをさせ，付けたい力は何かを，実態をもとに考えないといけないと指導があった。また，大事な部分は板書に残す必要性があることや，学び合いの際には，スピーチメモにしるしをつけてもらうなど，学び合いをしたという実感を残すことが大切であると教

えていただいた。学び合いの必然性を感じさせるために，教師が前向き，認める声かけを豊富にすることや，聞き方のよさやポイントを価値づけすることも学び合いの必然性を感じさせるために有効である。児童の語彙を増やす指導をしていくことの大切さも具体的にご指導いただいた。

(3) 成果と課題について

- １回目の研修で教材研究を全員ですることによって，様々な手立てを知ることができよかった。そして，２回目の研修もそれぞれ自分のものとして考えることができた。事前研修会にも多くの先生方が参加することができたため，研究授業や研修がより深まった。
- 授業協力ということで，他校の先生に本単元を事前に実践してもらえたため，指導の仕方について多方面から考えることができた。
- どのような視点で授業を構成していけばよいのかが分かった。また教材研究をすることによって，１学期からどのような取組をしておけばよいのかが分かり実践できた。
- 交流の大切さ，効果的な交流のための支援を考えることが，何を学ばせるか，どのように学ばせるかにつながりよかった。
- スピーチをさせるためのスピーチメモが，どの学年でも使え，日常活動にも広がって生かせる。
- ２回の研修で，同じ指導者の方の指導をうけることができよかった。
- 作文指導で，書くのが苦手な子に対する指導の工夫や推敲のさせ方なども研修していきたい。
- 今年度提案された内容を，学級作りを基盤として，各校の実態に合わせて実践していく力が求められる。

４　県の研究との関連

【今年度の研究での成果】　学び合う必要感　学び合うための形態

教師と児童１名がスピーチをして，それについて質問を受けて答えるというやり取りの中で，もっと詳しく話さないといけないことに気付かせることができた。そして，詳しく話すための観点が分かり，自分のスピーチに使いたい観点を選んでいけるようにした。使う観点を３つに絞り，内容が複雑にならないようにした。どのような観点をもってスピーチの内容をふくらませていけばよいのかはっきりしなかった児童も，自分の伝えたいスピーチに必要な観点をペアで話をしながら見付けていくことができた。ペアを替えたり，３人でしたりと形態を変え児童が相互にスピーチ練習していく中で，話すことの観点が確かなものになり，児童自身の中に身に付いたものとして残せることが分かった。

【今年度の研究での課題】　子ども同士の関わり

発達段階に応じて「話したい，聞きたい」と思える学び合いの必然性を感じられるような教材との出合わせ方を考えていきたい。評価については，本単元の中だけではなく，朝の会，帰りの会などのスピーチの中で汎用できているかを見取っていくことも大切にしないといけない。また子ども同士の関わりは，学級経営，人間関係づくりに関わってくる。語彙がなければ質問もできないので，普段の生活の中で子どもの使った言葉を価値付けし，語彙を増やしていく指導についても考えていきたい。